

知って  
おきたい

# 消化器の病気

第1回



## 丹野誠志

(たんの・さとし) 1990年旭川医科大学医学部卒、94年同大医学部大学院卒、同日本院准教授を経て、10年琴似ロイヤル病院副院長に就任、12年より同院院長、日本内科学会指導医、日本消化器病学会指導医、日本消化器内視鏡病学会指導医。

## 膵臓の病気 I P M N を知っていますか

膵臓すいぞうの病気といえば、「膵臓がん」を思い起こす人が多いでしょう。

膵臓がんは、細胞が塊をつくる「充実性腫瘍」の代表例ですが、その一方で、液体の詰まった袋(のう胞)をつくる「のう胞性腫瘍」が膵臓に多いことは意外と知られていません。

膵臓に「のう胞」があるといわれた人は、膵臓の専門医の診察を受けることを勧めます。なぜなら、「のう胞性腫瘍」には多くの種類があるため診断が難しく、消化器の専門医でも膵臓

を得意とする医師でなければ見極めがとて難しいからです。「のう胞性腫瘍」の中でも最近注目されているのが、「膵管内乳頭粘液性腫瘍(I P M N)」という病気です。

この病気は、自覚症状がまったく出ないため、人間ドックなどで発見されることが多く、偶然に見つかることが増えている病気です。典型例では、ブドウ

の房のような形の袋をつくるのが特徴で、名前の示すとおり、粘液を出す腫瘍細胞が乳頭状に増殖して袋の内側を覆い、内部には腫瘍細胞から出された粘液がたまって充満していきます。注意すべき点は、内側を覆っている腫瘍細胞が良性から悪性に変化していく、つまり「がん化」することがあるということです。さらに重要なことがあります。

それはI P M N自体が、がん化するだけではなく、I P M Nとは離れた膵臓の中に、新たに「膵臓がん」が発生する可能性があるとということです。このような膵臓がんが発生する頻度は、I P M N自体のがん化と比べて10倍も多いことが、私たちの最

近の研究でわかってきました。また、I P M Nのある人は、なしい人に比べると15倍以上も膵臓がんにかかりやすいこともわかってきました。では、I P M Nと診断されたら、どうすればよいのでしょうか。それにはまず、I P M N自

体に対して手術が必要かどうかを慎重に判断します。早期の手術が必要ない場合は、発見後、定期的に検査を受けることが重要です。ただし注意点は、膵臓がんは進行が早いいため、6カ月以上定期検査の間隔をあけないことです。